

熊本県立第一高等学校 平成29年度学校評価表

1 学校教育目標
 「くまもとの教職員像」、「県立中学校・高等学校における教育指導の重点」、「人権教育取組の方向」、「特別支援教育取組の方向」、「県体育保健課取組の方向」及び本校の「白梅の精神」等に則り、「健全な心身の育成」、「学力の充実」、「地域との連携」を柱に、生徒一人一人の個性を伸ばしながら、心身ともに健全で叡智に富み、凜とした気品のある心豊かな人材の育成をめざす。
 そのために、全職員が教育者としての基本的資質（①教育的愛情と人権感覚、②使命感と向上心、③組織の一員としての自覚）や専門性（①生徒理解と豊かな心の育成、②学習の実践的指導力、③保護者・地域住民との連携）の向上に努めるとともに、互いの連携と協力のもと、創意工夫を生かした教育の実践に努める。

- 2 本年度の重点目標**
- (1) 目的と目標の明確化による共通理解に基づいた協働体制の構築
 - (2) 教職員及び校務分掌間の一層の連携による効果的かつ効率的運営
 - (3) 平日及び土曜日授業の充実と平日放課後の有効活用
 - (4) 進路指導体制の構築を目指した研修の充実
 - (5) 幅広い経験に基づく人間形成を図る指導

3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学 校 経 営	学校経営の方向性の具体化	学校改革の更なる推進を指して取組検証・提言と各部・学年・教科等による実行	取組の検証と課題の整理を行うことにより、負担感の軽減の具体的なプランを実行する	・昨年度の取組の検証結果を踏まえ、各部・学年・教科等でアクションプランを作成し、実行に移す。特に、担任の負担感軽減について重点を置く	B	・学校改革プロジェクトチームによる検討によって始まったモジュール学習は軌道にのった。 ・負担感軽減についてはまだまだ十分とは言えない状況である。
	組織の連携と全職員の共通理解	学校教育目標実現に向けた組織の連携の強化	運営委員会を中心とした各部の連携の強化	・各部・各委員会での入念な打合せと関係部との事前協議 ・運営委員会、職員会議による協議と情報共有 ・年度末反省、学校評価等による検証	B	・運営委員会を毎週から各週に変更したが、各部や各委員会との連携は十分に図れている。また、年度末反省についても新しい方法を導入した。
			業務の効率化と統一化の強化	・「職員必携」の随時更新・活用による共通理解と業務の効率化	B	・「職員必携」についての活用は職員に徹底できていない。
		土曜日授業の充実と平日放課後の有効活用	モジュール学習の有効活用に関する共通理解の構築を図り、実動に移す	・学習力向上委員会でより効果的な学習内容を検討し、学年全体で取り組む。	B	・学習力向上委員会は効果的に機能し、モジュール学習の定着に大きな貢献をしている。モジュール学習については、次年度に向け内容の深化を目指す。
信頼される学校	開かれた学校づくり	保護者・地域・小学校・中学校・大学との連携	・公開授業週間について外部に向けた周知徹底と内容の充実 ・小、中学校への生徒による学習支援事業の実施 ・地域への学校行事の連絡や協力依頼の徹底	B	・公開授業は予定された期間を定めて実施したが、参観者が少ない。特に地域・小学校・中学校・大学関係者の参観者を増やすため工夫が必要である。 ・地域の行事等にも参加する機会が増えた。	
	特色ある学校行事等の情報	マスコミやホームページ	・マスコミ等を活用した学校行事等の情報の積極		・本校の活躍の様子は数多くマスコミに取り	

	発信	シ等の積極的活用	的な発信 ・保護者への連絡機能の強化 ・「保護者向け携帯サイト」及び「学校安心メール」の活用	A	上げられた。 ・学校から保護者に対しての情報発信についても、「安心安全メール」と「ホームページ」を効果的に活用し、危機管理上の連絡機能も強化できた。
教育環境の整備	必要な設備の充実と安全管理	施設・設備の充実と安全点検、環境ISOの取組	・省資源（昨年度比5%減）、リサイクルなど宣言項目の周知、行動の徹底	B	・施設・設備の安全点検は十分に取組めた。 ・環境ISOについては生徒の活動としても取り組むことができた。
危機管理の向上	学校運営協議会の合理的な運営	地域や外部委員との協力体制と連携の強化	・生徒や職員に対する防災等に関する情報提供の充実と防災マニュアルの作成	A	・防災面に関しては情報収集を徹底し、安全面を最優先した措置を取ることができた。
	緊急事態発生時における適切な対応	事故発生を未然に防ぐための想定した準備	・危機管理マニュアル作成や職員研修会による日常の意識向上	A	・防災マニュアルを今年度作成した。今後は職員、生徒に徹底していくことが課題である。
学力向上	授業の充実	アクティブラーニング型授業の実践	全職員による最低3回の授業の実践	B	・公開授業は6月と10月に実施したが、参加者数の増加は、まだ不十分であるのでさらに工夫したい。
		自己研鑽の場を設定し、教師の指導力向上	アクティブラーニング型授業をテーマとした研究授業及び授業研究会の実施	B	・研究授業については、各教科年間最低1回実施し、内容も深い学びを踏まえたものを教科内で工夫・検討してもらいたい。また、授業評価アンケートの活用については、教科担当者に集計結果を渡し、今後の指導の参考にしてより効果的な授業の改善つなげたい。実施には、時間が必要なのでLHRの時間に設定するなど工夫が必要である。
		3年間を見通した学習指導計画の作成	・シラバスの精度の向上	B	・各教科のシラバスはほぼ完成しているが、新入生が対象となる新入試に向けて指導データの改善を行う必要がある。
家庭学習時間の増加	各学年家庭学習時間の増加	平日2時間の家庭学習時間の確保	・学習実態調査等で生徒の取り組み状況を把握し、授業の工夫改善等を教科会で検討。 ・調査の分析を通して、担任との二者面談や教科担当者面談の実施。	B	・休日は増加傾向の学年もあるが、平日はほぼ横ばい状態である。授業内容・工夫、評価、指導などは生徒・保護者から8割を超える評価を得ているので今後も継続し家庭学習時間の増加につなげたい。また、現在4月のみ面談週間を設けているが、長期休業明けの時期にも導入するなどの検討を行う。

キャリア教育 進路指導	夢心し路拓の 現燃ら切生 実を自をく育 にや進り徒 現燃ら切生 成	進路情報の共 有化と発信	進路環境や 生徒の現状 に関する情 報の発信と 共有化推進	<ul style="list-style-type: none"> ・全学年学力分析会・進路検討会の実施 ・各種情報共有環境の整備 ・学年会、教科会との連携強化 ・「進路ニュース」（年4回）、「進路だより」（年10回）の発行 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・進路指導体制の確立が不十分と考えている職員は18.8%（学校アンケートの結果）どこが不十分で、何ををもって進路指導体制が確立されており、進路指導部と学年等の連携はどうかあるべきと考えておられるのか、具体的なご意見をいただきたい。
		教科指導力及 び進路指導力 の向上	各教科との 連携強化に よる職員の 教科指導力 及び進路指 導力の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・校内模試作成等を通じた問題作成能力の向上 ・各種研修会参加の促進 ・校内研修の実施 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・校外での入試問題研究会等への参加希望も増えるなど、意欲的な先生方が増えている ・「研修」という形態をとらずとも、職員間での進路指導に関する情報共有及び進路指導力向上が達成されるべきであろうが、まだまだ課題が多いように思う。
		進路志望実現 に向けた、生 徒自身の主体 性向上	進路志望の 実現に向け、 生徒自ら選 択し、調べ、 活動する環 境の整備	<ul style="list-style-type: none"> ・進路指導計画（3年間）の検証と改善 ・模擬授業、オープンキャンパス等の体験型授業の主体的参加の促進 ・進路資料室の整備と利用促進 ・進路ノート、受験の手引きの活用促進。 ・1,2年進路関連LHR（年2回）の指導事例の作成。 ・キャリア教育に関するLHR、総合学習計画（3年間）の検証と改善 ・キャリアガイダンス（出張講義）の回数増及び広報の工夫（実施回数年間15回以上、平均参加者30人） 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリアガイダンス（分科会）は計画的に実施することができた。実施回数は12回、平均参加者は27名である。（1/23現在） ・各方面から進路ノートに対する意見をいただいている。次年度は、内容の充実をはちろん、生徒活動履歴のポートフォリオとして活用する。早めの改訂を行い、年度当初すぐに配付できる体制を整えたい。
生徒指導	生活指導と 徹底	基本的な生活 習慣の確立	自己管理力 の向上によ る、服装違 反・遅刻者 数の減少 自ら挨拶を する態度の 育成 携帯電話の 使用に關す るマナーや エチケット 等の育成	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶・服装・遅刻指導の実施 ・生徒会による各学期2回の挨拶運動実施（それぞれ1週間） ・貴重品袋の活用の徹底 ・時間の厳守（5分前集合の徹底） ・集会時の生徒主体の運営等 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・集会時や始業の時間を守ることに關しては概ね定着したと思う。挨拶や礼節に關して、一部に心遣いが足りない生徒がおり、その評価が全体のイメージとなる傾向があったことは残念であった。ただ、逆に外部の方からマナーや気持ちの良い挨拶をしてくれたとお褒めをいただくことも多くあった。
	安全教育	交通安全教育 と交通マナー の定着	自転車乗車 ルールの遵 守	<ul style="list-style-type: none"> ・自転車通学生集会の実施 ・「交通安全の日」の活動を含む交通安全教育の充実（月1回） 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・軽微ではあるが自転車の事故数がなかなか減少せず今後の指導に課題を残した。交通マナーに關しても外部から苦情が届くこともあった。 ・ただ多数の生徒は交通ルールを守り安全に留意することが出来るようになってきたこと

					で重大事故に繋がっていないのではないかと 思う。交通安全について は生命に関わること になるので継続的にしつ かり指導にあたってい きたい。
自主自律 の精神	規範意識の高 揚 リーダーの育 成	一高祭体育 部門・文化 部門の内容 の検討、充 実	・生徒会中心の学校行事 等の企画立案と実施後 のアンケートの分析 ・リーダー研修会の実施	A	・一高祭体育部門にお いて生徒だけで企画か ら当日の運営に至るま で教師が表に出ず一切 を生徒に任せる大会に した。見事に成功に導 いてくれた。あらため て一高生の底力と限り ない可能性を感じた。 ・リーダーの育成に 関して研修会や部活動 等をとおして継続中 あり今後も粘り強く指 導にあたっていき たい。ただ、生徒中心の 学校行事運営が成功し たことで自然発生的に リーダーの育成がなさ れたことは今後の指導 のヒントとなった。
人 権 教 育 の 推 進	教育生活動 全体を通 じ人権推 進	職員、生徒の 人権意識の高 揚	・人権教育講演会の実施 ・生徒相談部と合同の職 員研修（年3回） ・各学年人権 LHR を実施 （年3回）	A	・生徒相談部・保健部 との合同講演会を実施 し、それぞれの役割分 担がなされた各部の負 担が軽減された。生徒 には、3部合同の意識 が薄く、ストレスに対 する講演会との認識 であったようである。 今後、講演会の目的 を明確にしていく必 要がある。各学年で のLHRは、生徒によ り効果的に行えるよ う、各学年との日程 の調節を行った。ま た、2年生は新たな 教材を用いた。今後 生徒の現状にあった 教材・授業開発を行 う必要がある。
	「命を大切に する指導」の 推進	「命を大切に する指導」の 推進	・「命を大切に する心」を育む指 導プログラムの周 知 ・授業、HR活動 及び特別活動（部 活動等）で、生徒 が主体的に活動す る内容を盛り込 んだ実施 ・校内研修や講演 会の実施と職員 の意識向上 ・ワークショップ によるストレス 対処プログラムの 実施	A	・命を大切にする取 組を、いじめを許さ ない宣言や人権教育 LHRで行っている が、生徒自身の人 権感覚の育成に課 題が残る。今後も 生徒の活動の中で 生徒の人権意識の 高揚を図りたい。 ・生徒人権委員 会は、毎月委員 会を開き、活動の 確認を行っている 。ワークショップ の感想の集計や 人権教育だより 「ハートフルメモ リー」を各学期に 作成し、全校生 徒へ配布を行う など、生徒が主 体的に活動してい る。今後も継続 したい。

いじめの防止	健全な人間関係の構築	いじめ根絶に向けた取組	いじめ防止の年間指導プログラムの実践。アンケート結果への組織的対応	<ul style="list-style-type: none"> ・「いじめ防止の日」（月1回）と「いじめを許さない宣言文」の宣誓（→いじめゼロを目指す） ・全学年の生徒人権委員会主導でいじめ防止についてのLHRを実施 ・いじめについてのアンケート（4回）結果を受けての迅速かつ、管理職、学年、生徒指導部、生徒相談部との組織的対応 	A <ul style="list-style-type: none"> ・いじめを許さない宣言は、生徒人権委員会により毎月行うことができている。1学期での人権LHRでは、いじめに関して、人権委員が中心に運営し、内容についても、生徒たちがまとめることができた。 ・いじめアンケートは現在まで3回実施し、把握したいじめの件数は1件であったが、学年の協力で解決するに至った。また、人間関係のもつれが見られることから、リレーション及びストレス対処をさらに進めていかなければならない。
特別支援教育	気持ちと基盤に基づいた理解と対応	特別な教育的な支援が可能な生徒の把握と支援策の実施	支援が必要な生徒が安心して生活を送れる環境づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・組織的な支援教育体制の構築（特別支援教育、特別な配慮の必要な生徒への対応） ・学年会、校内委員会での情報共有 ・週1回の生徒相談部会の実施 ・職員研修（年3回）と職員会議による全職員の共通理解 	A <ul style="list-style-type: none"> ・週1回生徒相談部会で生徒に関する情報交換を行い、学年と連携し対応することができた。特別支援に関しては、別室登校している生徒だけでなく、教室に登校しているが課題を抱えている生徒への対応をさらに充実させる必要がある。
地域連携	地域と連携した防災マニュアルの作成	地域の自治会や防災連携マニュアルの作成	様々な自然災害に対応できる防災マニュアルを作成する	<ul style="list-style-type: none"> ・年間5回の学校運営協議会の開催 ・合同防災訓練の実施 ・本校独自の防災マニュアルの具体化 	A <ul style="list-style-type: none"> ・学校運営協議会は予定どおり開催できた。防災に関して地域といかに連携すべきかの大きなヒントとなった。 ・本校独自の防災マニュアルが完成した。今後全職員にどのように周知徹底していくかが課題である。

<p>4 学校関係者評価</p> <p>学校関係者評価委員の皆さんから、学校評価アンケート結果や学校評価の自己評価を踏まえた意見や提言をいただいた。本校の教育活動全般については高い評価をいただいております。本校への期待の大きさが伝わる内容であった。主な意見や提言等に関しては以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学力向上はもとより、これから生きていく上で大事な人権教育やキャリア教育等にも力を入れておられることは素晴らしいことだと思います。引き続きの取組をお願いしたい。 ・生徒も保護者も学校を誇りに思っていることがうかがえます。何よりもアンケートからは生徒たちが学校生活を楽しんでいる様子がよくわかりました。また、アンケートの回収率の高さにも驚かされました。 ・生徒へ明確な進路目標を立てさせ、読書に親しませ、予習、復習への取組を徹底させてもらいたい。 ・いじめ問題については、アンケートなどにより対策が具体的にできていることは評価できる。 ・キャリア教育（進路指導）においては、先生たちに温度差を感じるのので、ある程度のコンセンサスを図っていただきたい。この差は子どもたちに影響するので。 ・モジュール学習の成果は受験結果にも繋がっているように思う。 ・広範にしっかり取り組んでおられる先生方のアンケートに、生徒の学習量が不満足と示されていることが気になりました。

5 総合評価

学校評価アンケートの集計結果や生徒の学校生活等からみると、生徒たちは高い満足度を持って日々の生活を送っていることがうかがえる。マナー、交通ルール、時間等については自主的に規範意識を持って臨み、教師も毅然とした指導を行っている。また、保護者も同様に、本校に対しての期待や満足度は高いことがわかる。また、外部の方からのマナーに対する評価等は上昇しているように思う。一方、予習・復習への取組や明確な進路目標を持つこと、読書への取組については改善の視点を持って努力することが必要であることが分かる。

将来のことについて真剣に考え自らが自主的に行動できる生徒もいる反面、教師から指示されないと動けない受け身の生徒も未だ多い。自分で考え、自分の意思で行動できることの必要性を本校においては、大きな教育目標の一つと掲げているが、目標到達には遠い状況である。教師自身が生徒を指導するという考えから、ヒントを与え、生徒の手助けをするというような考え方をしていくことも必要であると考え。生徒が持つ力を教師が信頼し、任せてみるという気持ちを持てるようになれば更なる高みが見えてくるのではないかと考える。

新学習指導要領の改訂が来年度入学生より始まる。それに向けて、大学入試等も大きく変わろうとしている。本校では昨年度より、放課後の時間を利用したモジュール学習に取り組んでいる。徐々にではあるが考える力が付きつつあるのではないかと考えている。しかし、運用等についてはまだまだ考慮すべき点もあり、次年度に向けて更に深化させていきたい。

働き改革が叫ばれ、教職員の負担感軽減を本校においても取り組んでいるが、仕事量が減っているわけでもなく大きな成果は上がっていない。ただ、我々一人一人が意識を変えなければこの問題は解決しない。一人一人の工夫と、組織をあげての効率化を実践することにより少しずつでも負担感から充実感への転換を図り、元気な姿で生徒の前に立てるように継続的に努力しなければならない。

6 次年度への課題・改善方策

- ・学校評価のアンケートの内容を具体的な学習成果、語学力などの達成度を回答させ、自己点検評価をさせてみる。（満足度評価から成果評価への転換を工夫する）
- ・生徒自らが考え実行する場面をできるだけ多くつくる。教師は陰から生徒を支えるような取組を考えていく。
- ・負担感軽減の取組については継続的に取り組む。学校行事や日程等についてもスクラップできるものは思い切って実行する。
- ・モジュール学習の教員研修を充実し、更に実のあるものへと深化させていく。
- ・授業評価を有効的に活用し、教師の指導力向上を図る。